

〈解答〉

- ① 1 おもうよう（ひらがなのみ可）
 2 「例」弓が上手であることを人に言いふらそう（18字）
 3 ウ
 4 イ
 5 ア

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

①

「古今著聞集」は、鎌倉時代に橘成季たちばなのなるきによって編纂へんさんされた世俗説話集である。今昔物語集、宇治拾遺物語と並んで日本三大説話集の一つに数えられる。

- 1 古文に出てくる「au」という発音は「o」と音読するので、「やう」は「よう」となる。
 2 直前の4、5行目「射殺したりといひて、弓の上手のよし人に聞かせん（＝大鹿を）射殺したと言って弓が上手だということを人に聞かせよう」という部分をまとめる。

- 3 「かしらがきをすれども」は「頭をかいたけれども」の意味である。「けれども」は逆接なので直後の「さらにえきなし（仕方がない）」と合わせて考えると、ウ「悔しさ」が最も適切である。

- 4 「さらにえきなし（更に益なし）」は、ここでは「失敗してしまったことをいくら悔やんでも）仕方がない」という意味で使われている。これに最も近い故事成語は、「覆水盆に返らず」（周の太公望が出世したとき、離縁していた妻が復縁を求めて来たが、こぼした盆の水を元に戻せたら求めに応じようと言って拒絶した故事から転じて、「一度してしまった失敗は取り返しがつかない」ということの例え）である。

- 5 「この男」は、大鹿を射殺したと言いふらして弓が上手だということを人に聞かせようという虚栄心から、捕まえたはずの鹿を取り逃がすという予想外の結果を招いてしまったのである。イ「最初から思った通りの結果を得ることができた」ウ「弓の上達を願う向上心」、エ「道徳的には結果としてよかったと思っっている」の部分それぞれ適切でない。

〔現代語訳〕

前の大和の守源時賢の墓は、長谷という所にあった。その墓を守る男が、わなをかけて鹿を捕まえていたのだが、ある日、大鹿が（わなに）かかった。この男が思ったことには、「わなにかけて（鹿を）捕まえることは簡単だ。射殺したと言って弓が上手だということ人を人に聞かせよう」と思っ、わなにかかった鹿に向かって矢をつがえて射たところ、その矢は、鹿には当たらず、わなにひっかけていたつる草に当たったので、つる草は射切られて鹿はなんなく走って逃げて行った。この男は、頭をかいたけれども、無駄なことだった。